

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2013年度研究成果報告書

| | | | |
|-------------------|--|----------------|------------------------------------|
| 研究科名 | 立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 コミュニティ福祉学 専攻 | | |
| 研究代表者 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏名 | |
| | コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻 博士課程後期課程 2年 | 星野 友里 印 | |
| 指導教員 | 所属・職名 | 氏名 | |
| | コミュニティ福祉学研究科・教授 | 森本 佳樹 印 | |
| 自然・人文・社会の別 | 自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会 | 個人・共同の別 | <input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名 |
| 研究課題名 | 全国グループリビングの運営状況およびグループリビング住人の合意形成に関する研究 | | |
| 研究組織 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏名 | |
| | | | |
| 研究期間 | 2013 年度 | | |
| 研究経費 | (支出金額) 197 千円 / (採択金額) 200 千円 | | |

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

今後の高齢者夫婦のみ世帯や高齢単身世帯の増加をめぐる諸問題については、かねてより多方面で指摘されてきたことである。本研究は、グループリビングという住まい方はその対応策の一つに成り得るといふ仮説に基づき進められたものである。

具体的には、まず、グループリビングが持つとされている①住人同士の見守り機能と②住人のグループリビング運営への参加の可否に着目し、日本各地のグループリビング（主に財団法人 JKA 補助グループリビング）の運営者を対象としたヒアリング調査を実施した（研究 1）。また、それと並行し、先述の②が実践されているグループリビングを訪問し、住人らの合意形成の場にて参与観察を行った（研究 2）。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[グループリビング] [高齢期の住まい・住まい方] []

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究1: グループリビングの現状と課題—「グループリビングの運営状況に関する全国調査」

【目的】グループリビングの運営状況を把握すること。

【対象】日本各地のグループリビング合計 13ヶ所の運営者ら(2ヶ所は支援者)を対象。13ヶ所のうち、10ヶ所は財団法人 JKA の建設費補助により建てられた「高齢者生き生きグループリビング」であり、残りの 3ヶ所は高齢者専用賃貸住宅や古民家の活用による。運営主体は NPO 法人が 10ヶ所、社会福祉法人が 3ヶ所である(JKA 補助グループリビング)。これらの所在地は、北海道、関東地方、関西地方、中国地方の 11 都道府県におよぶ。

【データ収集法】データ収集期間は 2013 年 7 月から翌 2014 年 2 月、半構造化面接法による。なお、事情につき、1ヶ所は現地の見学のみで止め、後日、書面での回答を得た。平均所要時間は 1ヶ所につき約 89 分。インタビューの内容は、調査協力者の同意の上で IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。

【質問項目】①グループリビング設立の経緯、②グループリビングの運営について、③今後の活動の方向性

【データ分析法】まず、質問項目に沿って JKA 補助グループリビングの回答を整理した。その際、「難しく感じているところ」については非常に多くの回答が得られたため、難しさとそれを受けての対応の 2 つに分けて見ていくことにした。つぎに、その他のグループリビングの回答を加え、更なる分析を行った。特に着目したのは、JKA 補助グループリビングとその他のグループリビング、両者の相違点である。(※なお、紙面の都合上この部分については割愛する)

【結果】まず、本研究が対象としたグループリビングの半数以上が NPO 法人によって運営されており、そのうちの 5 つはグループリビングを主たる目的とする。JKA 補助グループリビングのほとんどが、グループリビングを知ったきっかけとして JKA の補助事業の存在を挙げており、「応募締め切り日が目前で、大急ぎで提出書類の準備をした」という話を度々耳にした。対して、その他のグループリビングのうち 2 つは、国土交通省の高齢者(等)居住安定化モデル事業の利用(JKA 補助事業の補助率の低下等から、こちらへ切り替えた所が 1 つ)、残り 1 つは個人の活動に拠るものである。入居者募集の方法は、法人サービスの利用者、新聞広告、ポスティング、口コミ、地域包括支援センター、ケアマネなど様々である。見学者への説明にあたっては「自立」という言葉が頻出し、その意味するところは、身体的自立と自己決定の尊重に割れている。

つぎに、運営者らから見た、グループリビングの良さと難しさは以下の通りである。

<良さ> 自由な生活、住人同士の関係、地域交流、自分も教えられるところがある、栄養改善

<難しさ> 認知度の低さ、持ち家を手放して入る方が極めて少ない、共同運営ができない(まとめ役の不在、身体状況の悪化)、ミーティングがうまくいかない(認知症、意見が出ない、裏で決める)、住人同士の関係(わがまま、命令、陰口)、住人と運営者・支援者の関係(いちいち許可を取ってくる、強く当たられる)、万が一のときの支援体制(夜間、緊急時、要介護、認知症)、地域交流、料金設定

<対応> (見守りの不安→) 入居者同士の見守り体制、職員による挨拶まわり、宿直対応。(ミーティングの代わり→) 職員による意見の聞き取り。(住人同士のトラブル→) 仲裁をする、あえて立ち入らない、ケンカに引きずり込まれて一緒にケンカをしている。(要介護・認知症→) ヘルパーや小規模多機能型居宅介護の契約、他の施設(有料老人ホームやグループホームなど)を案内

運営者らの立場は、様子見(1日に1回)、コーディネーター(調整役)、管理者(人によって捉え方が違う)、趣味仲間と多様で、その時々に応じて役割を使い分けているとの声もあった。グループリビングへの見方もそれぞれ異なっており、具体的には、自由、早めの住み替え先、自立と共生の住まい、第3の住まい、制度のはざまと表現する者もいれば、「入る人によって雰囲気が違う」や「あまりにも多様で絞ることができなくなった」と言う者もいる。また、「食事作りに住人が関与していない所は有料老人ホームと同じ」という厳しい見方もある。

最後に、今後の展望としては、入居者増やストック形成、若い方(自立した方)がほしい、地域交流の進展、支援体制の構築・強化などの意見が目立つ。ターミナルに関しては、グループリビングでそれを迎えるか否かで見解が分かれている。また、グループリビングの取り組みを都会へ宣伝し、全国規模で活動してはどうかという提案もあった。

【考察】グループリビングの短所は長所の裏返しであり、長所をうまく活かせない、グループリビングを円滑に運営していくことはきわめて難しい。本調査では、グループリビングの良さよりも、難しさについて聞く機会の方が圧倒的に多く、その運営に行き詰まりを感じている様子がうかがえた。グループリビングは比較的自由度の高い住まい方であり、運営者や住人らの働きかけによって、如何様にも姿を変えていくことができる。その分、それぞれが明確な意思を持って、状況に応じた適切な対処をし続けなければならない、決して容易く実現できるものではない。しかしながら、グループリビングが広く知られていないことや近隣高齢者の住宅・土地の所有状況、将来的なケアの問題については、事前にある程度予測できたはずである。JKA から建設費の補助(7~8割)を受けるとなれば、どうしても早急に計画を練る必要があったのは頷けるが、初動の段階での検討不足がこうした結果を招いていることは否めない。事後的対応になってしまうが、それを今後どう乗り切っていくのかは、運営者らのコーディネート能力にかかっている。

研究成果の概要 つづき

研究 2: グループリビング住人の運営への関わり方—「グループリビング住人の合意形成に関する調査」

【目的】合意形成の場における住人の参加の実態を把握する。

【調査場所】グループリビング計 2ヶ所（以下、グループリビング A、B と記す）。両グループリビングでは定期的に住人らのミーティングが行われている。よって、住人の合意形成の場が有効に機能していると考え、今回の調査地に選定した。

【データ収集法】参与観察法。①住人の関わり方と②回数を重ねるにつれての変化（グループリビング A に限る）という 2 点に着目しながら、ミーティングの様子を観察し、終了後にノートへ記録した。なお、調査の実施回数は、グループリビング A が計 6 回（毎月 1 回／約 30～60 分）、同 B が計 1 回（毎週 1 回／約 30 分）である。

【結果】グループリビング A は長細いテーブルの左右で、年少者グループと年長者グループが大まかに分かれる座席配置になっており、席が近い方とは比較的気が合うようだが、両端の方が意見を交わすことはほとんどない。運営者は、司会進行を担当し、議題の提示のほか、発言の見られない住人への問いかけや住人から出された意見の総まとめを行っている。また、年少者グループが運営者の補佐をすることもある。

基本的に、運営者が事前に用意してきた議題に沿ってミーティングは進められている。住人が事項を追加することもあるが、それはやや一部のメンバーに偏っており、その伝え方も人によって異なっている。年少者グループと比較すると、年長者グループは口数が少ない。ただし、年少者グループの多くが欠席した際は、平常時よりもよく話をしてきた。全体的に、明るい話題のときは和やかな雰囲気だが、込み入った話題になると空気が重くなり、沈黙に包まれることさえある。

変化点に関していえば、夕食をめぐる激論が交わされたことをきっかけに、住人から調理担当への連絡ノートが作られ、その味は少しずつ改善されつつある。居住期間の短い住人は、調査開始時は「私は入ったばかりだから…」とよく口にしていたが、だんだんとそれを言わなくなった。欠席者に対するフォローが不足しており、話にズレが生じている場面も時おり目にした。計 6 カ月間の継続的な観察によって、その日の参加者の顔ぶれで、ミーティングの雰囲気が大きく変化することが見て取れた。

グループリビング B の住人は、ミーティングが始まる前からレジュメに目を通し、その内容について近くの方と話をしている。ミーティングの最中も、司会進行役の運営者が話し終えるや否や、複数名が自由に返答をする。また、大人しい方には運営者が話を投げかけ、そのときは皆が静かに聞いている。住人のなかには、筆記具に加えて、これまでのレジュメを綴じたファイルを持参する方もいる。

【考察】グループリビング A では自分の意見に誰か（主に親しい間柄の方）が同意してくれるという安心感が意見を引き出している。ただし、その口ぶりから推測するに、ミーティング以外の時間（主に夕食時）にも非公式なミーティングは行われており、そのときの方が会話は弾んでいるようである。月 1 回のミーティングでは形式が重んじられ、一定の緊張感が常に保たれているが、それが却って「言い出しづらさ」を生んでいるとも考えられる。そこで、運営者や事務局スタッフ（ミーティングに同席）、そして、住人自身も全体を見回し、話を振ったり、冗談を言ったりなどの配慮をしているものの、自由闊達な議論までは達していないのが現状である。しかし、居住歴の浅い方がしだいにミーティングの輪へ加わっていったことから、居住期間の伸長ないしは経験の蓄積により、個々人のミーティングスキルの向上が見込まれる。

一方、グループリビング B のミーティングは、穏やかな雰囲気、フリートークに近い印象を受けた。グループリビング A と同じく、司会進行は主に運営者が行っているが、運営者と住人のあいだの距離が近く、話をしやすいようである。その背景には、長年の経験は当然として、グループリビング B の入口に運営主体（NPO 法人）の事務局を配し、両者が頻りに顔を合わせていることや、運営者が住人の一人に弟子入りするという形で趣味を共有していること、そして、個人の性質があると推察される。

総合考察：グループリビングは制度化された住まい・住まい方ではない。そのため、各グループリビングが思い思いの方針で運営しているのが現状で、一様には捉えがたい。JKA 補助グループリビングに関しては、居室面積や設備・環境といったハード面は大よそ共通していたが、介護施設に近いものから「早めの住み替え先」までその幅は広がっている。住み慣れた自宅を離れたくないという思いや、将来もしくは今すぐの介護ニーズは想像以上に大きく、グループリビングの入居者集めは決して容易くない。そこで、どういった層にアプローチをするかは、他でもない運営者側の判断にかかっており、それによって中の生活もある程度は規定される。そのため、選別的になるのは好ましくないが、介護施設でも高齢者住宅でもなく「グループリビング」を指向するのであれば、入口のところが最も重要である。そして、次の課題、住人の運営への参画にあたっては、意見を出しやすい雰囲気作りなど、運営者側の配慮がまずは求められるだろう。

※この（様式 2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

2013 (平成 25) 年度 財団法人 JKA

「お年寄りが幸せに暮らせる社会を作る活動補助事業」

新座ワークショップ「地域で暮らし続けるグループリビング」

2013 年 12 月 8 日

於 グループリビングえんの森 (埼玉県新座市)

基調講演

グループリビングという住まい方

—有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅との比較から—

以上